

源五兵衛
おまん 薩摩歌

近松門 左衛門 作

地櫻咲く彌生は雁の出かはりに。新参の燕
おきつけてあとを濁さぬ水の面。這出の蛙
二合半首にかけたか杜鵑。木々の梢も繁
藏と誰が呼子鳥草履取。一季半季の花鳥も
フシとかくは。御縁次第なり。地はやり小唄
も時につれ時の昔と何處へ往く。寛文年の
頃かとお御城本は但馬國。京の屋敷は千本
通千本立の植込みも。若葉の錦見かけか
ら長者町をば押しまはし。出水通の長屋門
此の大屋敷をあづかり。京江戸御國の御用
等一人に承る。御留守居平鹿の何某殿にこ
そ中途に奴草履取。召置かるれと方々より
引を求めて目見えする。此の頃五人三人づ
つ毎日吟味なさるれど。好い男さへ稀なれ
ば。すこしよめなる女房のフシびかしやか
ふるは科ならず。地中間頭寄親の四十平下

見をして。調ム、いづれも好い奉公人衆。
さて御家の若旦那殿様よりお小姓に召出さ
れ。親旦那様御同道で只今は御江戸に。御
若年の若旦那氣を知つた上方者を抱へてや
らんと仰せられ。小萬様と申す姉御様お部
屋のお庭へ召出され。簾ごしに御覽ある女
中よつての御極め。女中多いといふ中にも。
文のすらりと眉目の好い。二十餘りな女中
が受返答をめされう。林殿とて姉御様の御
氣に入り。第一此の人のいひなし地とはい
ひつ縁次第仕合次第といふ處に。小庭へ廻
る車戸のかけがね外す女の聲。これ四十
平。奉公人衆揃うたら。一人づつ地お庭へ
まはしやといひ捨てて立歸る。それくあ
れが林どの簾の内は姉姫様。御前が近いせ
りあはす下馬前をして振りませい。ないと

いらへて振出す手先上りの頭八分。腰のひ
ねりに足取りにすつ／＼。すつ／＼砂
地に膝をする花梅花皮と散る花と。ざんざ
めいたる掃庭の椽の上には腰元衆。簾に掃み
しおばな紙フシ姉御様ごと奥ゆかし。地中
も林は手をついて簾の中より何事か。御意な
さるればあい／＼とオクリお返事申して尋
ねける。オキこれ／＼さきな絲鬢の鬢かりつ
けた鎌鼬奴。今までは何處に居て在所は京か
田舎か。お小姓方の奉公は髮月代にお好みあり
手覚えあるかと尋ねれば。大夫わつちが生國陸奥
の國七ツ道具の二通り。お馬の湯洗ひ伏せ起し
武家の奉公しからせば。味噌味噌汁の花ちりて
近年高野に相勤め。小姓廻しは致せしが高
野六十那智八十。きんか頭の若衆にて。遂に
月代割つた事フシごはりませぬと答へける。
ワキ氣疎や怖や其の様な。目出たい。若衆に升
かけを切米望み次第ぞや。次な男はどうぞ
どうぞ。大夫御拙者は悴の時分より醫者衆に
相勤め。町人藝や香附子方の奉公は不案内。

境つたい我等は川考持ち同じ處に當歸まで。
半夏くと季を重ね罷り在し傍輩の。中居

にちよつと甘草の甘うまい事仕り。旦那依
否いたされ詮議まぢく麥門冬。季中に其

處を追出し藥それより心に我遠を張り。よ
しや浮世は陳皮の皮肩に木香かたけても。

地黄に大根しらがまで斯ては果じと。紺の
だいなし生薑一へぎ。腰に一本藥研鈔。

らに鍋墨罷人夢。煎じ詰めたる奉公人誓
文白蕪和中散。身を粉藥に御奉公フシ定齋

なしとぞ答へける。ワキけに氣の藥なもの
なれど。女中の前の長口上近頃天驚絨の半

襟かけた。次の男は町の風。武士の勝手は
合點か。木夫までもお目利今極め極印打へ

て私儀は。銀座に永々使はれ駕籠乗物の
はいくぶき。京者の正眞お屋敷方は新

分銅。聲になまりはまじらねど少といきに
くいと申す故。歩を引れても奉公のしなか

へますといひければ。ワキそれでは此方に
使はれぬ。末の季までは包みのま、フシ宿

に居ややと笑はる。地後な奴が國處あま
と髓の赤松をオクリ打割り。松の油煙髭氣味

よい頭のすり鉢鬢。江戸すりがらしと見
えたよな。木天御意の通りに丁稚奴は。

信州木曾の山家者。てつかく冷ゆる寒國の。
髭に氷柱の朝嵐。布子一つでお供先

ふるか信濃の。ハッア冷たいな。實に。
雪國で身を寒晒し唐辛。天目に御器集錢

酒。一兩二歩の取替を。フシ春めきながら
借越して。ハルヲシ末白雪の買がかり。首だ

け積る借錢の。深田に馬を駈落いたし。木
曾を走つて参りしと。二人いへば各打笑

ひ。左様な者を抱へては。此方に算用粟津
の原とカツミどつと。興をぞ催しける。ワキ

お庭の隅に目をもつて基盤格子の染帯を。
骨牌結びや年配も二二三四五六七。押せ

くふつて出でませい。在所故郷は何處に
て小姓廻しの一通り。お江戸の勝手覚え

てか。供先乗打ち下馬前に。大名方の目標
もフシ知るや如何にとありければ。せがれ

九州薩摩者推參ながらいにしへは。大小
刀もさそふ水叶はぬ需に身を浸し。廣い薩

摩をせばめられ。近い朝鮮琉球より、遠い
あづまは日本の地。命菜種に油の涙。つか

み奉公致しても戀しい奴めにま一度と。江
戸に三年都に二年公家武家方のお小姓髪。

ゆひたては持ちませす六十餘州の大名様。
お馬櫛標お駕籠押への紋印。そらに覺え

て罷在る御奉公は縁の物。これを取手に
召置かれは常江戸脇城國脇まで。申せば事

も長い事。先づ一國名に高き。城主様方あ
らましとスエテ口拍子にて。連ねけり。

諸國 鐘 じ る し

地 武家繁昌の御威勢我等が口にかげまくも
。勿體波風治まりしお江戸は貴賤群集の中

。御同朋をつれらるるは外に數なき類な
き。フシお家の是がしるしなり。ハルヲシ重ね

盛羽の大烏毛。對のお道具突立て、お駕籠
の者は裏菊の。裾にませ簾染めたるは名に
し奥州。五十四郡のフシ旗頭。地旗は白旗

黒羅紗の。杉形袴に羽織着てお駕籠かくのは是ばかり。同國若松の主ぞと誰白河は大身の鍵。かごの紋は松皮菱鱗形の腰替り。白頭の振禿二本松の城主とかや。素鍵の鉤に枝垂絲さつとしだれて。しだれ鳥毛の大

小は。これ南部殿。フシ津輕殿。奥大名の長道中奴が首も投袴に。紺に手杵をつく。

くくくく岩槻の御城主と。フシ名乗つて出羽の米澤は。摘鳥毛の唐人笠。六尺は重釘抜白鳥の笠餘袴。煤竹羅紗の袋袴大鉤打つたる印こそ。庄内の主ぞと。白熊の天

目鞘。これが秋田の佐竹殿。劍鎧の中じめに六尺模様はぐるくく。御紋も車は越後の村上。黒羅紗の輪鼓袴。同じく桔梗十文字紺に無紋の六尺は。加賀に梅鉢百。二十萬石につくものなし似たるものなし。

御紋ばかりは越中も似たりや似たり杜若花は菖蒲。菖蒲皮の角十文字。白頭の大禿これ。越前家六角の。筒袴の二本道具は。フシ

若狭の小濱。劍鎧輪鼓の鉤鍵素鍵は伊賀伊

勢の津の御城主。花色羅紗の中着袴輪違の六尺は。相州小田原兎巾頭と大身の鍵は。下總の國佐倉の御城主栗色のたき袴。筆形の中締は江州彦根の。フシ御大將。黒熊の如意寶珠駕籠は輪鼓に角の棒。美濃の加納の主なり。コハリ青貝柄に切立袴信濃の松代。

白柄に白袴兎巾頭駕籠は東木丹後の宮津。裾膨の對のお道具出雲の松江。駕籠の紋は丸に薦の葉のきませ。退けくとつと退け

くく鳥取鳥毛大鳥毛。因幡伯耆のお國取播磨の同國印も似たり。姫路は赤し明石は黒し何れも素鍵の中締にて。分銅形の一對は備前の岡山。鉤鍵に白獅子の揃毛の棒は備

中松山。駕籠の紋は丸に虎の尾びんとはねたる備後の福山。獨樂形の白鳥毛駕籠は紺に斷の染抜き。袋袴はフシ安藝の廣島。又四國の御大名。熊の皮の投袴は。讃州高松同じく伊豫の松山は。黒熊の唐盃に。

お道具持が酔うたとき。酔うたとき。とさく土佐の高知は。フシ中ぶぐら。ハルシお

駕籠は紺に香の圖なり。阿波淡路兩國主。撥木袴と丸十文字。六尺はつなぎ菱つなけや。くく永樂錢の駕籠印。黒鳥の末廣は周防長門の萩の殿。さて九州にいたつては御紋も石餅。まんまる鳥毛は筑前福岡の御城主。蠟燭袴と鎌鍵は筑後の久留米。天目鳥毛は同國柳川白熊のすみ袋。杉形の中締は

ハツミフシ豊前の小倉。フシ中津の主。地白分銅は豊後の杵築。萌黃羅紗の袋袴。コハリ白滑皮の裾ぶぐら。銀杏の丸の駕籠の紋肥前佐賀の御居城。大袋は同國唐津すん切袴に銀の笠。手杵は島原平戸の城主。白猪の丸

筒裾膨同じく筆袴。駕籠は淺黄に山道こそ代々肥後の御國主。劍形は日向大名十文字は對馬の縣。黒熊の片鎌は高麗までもかくれなき。大隅薩摩の御大將。其の外諸國の御大名。數も限りもあら慮外。申すも長柄

の地御鍵じるし。フシあらし斯くと述べければ。地簾の外外さはくくくようく言

うたり申したり。扱もくと稍暫し。フシ

歌

摩

を叩いてぞ褒めらるる。やれ幸ひの奉公人。此の者に極めよと。四十平を召出され首名殿へ申して。取りかへ渡し吉日なれば今日中に請判極め。今宵からお屋敷に泊らせよ。薩摩者とあるからはさの字をのけて津摩藏とお付けなさる。彼へ立つて休みませない。くくくと立ちければ四十平小隅へ招き。聞して切米は何程ほしい。半季に二兩二步下され。四十平興さまし。それでは一年五兩か。いかにもくく近年五兩取ります。すれば其方は質盛ぢや。地道理で女中の氣に入つたとつれて。入日も三重短夜や。フシ秋の初夜過ぎ。はや夜半蒸くり暑う寝にくやと小萬の君の夜半起き。庭にとほんと風うけて。ア、なま寝や此方が様に肥えたものは猶暑い。男持つて瘦せたいぞと獨言してこれなく。同土戸の錠が下りずにある。林が粗相で忘れたか地誰そ来いやいと召す處へ。屋敷廻りの拍子木の音月に近寄る影を

見れば。新參の津摩藏ヤアは好い慰みと。つい立寄るも女松の蔭。フシ男氣入れぬお部屋なり。地新參は勝手知らず戸のあくまに突と入り。庭のすみく拍子木打ち爪立てて蚊帳の中。好もしさうに見る間にそつと廻つて戸を引立て。錠さす音に肝つぶし申し。未だ私が出ます錠あけて下されませ。調いやく此處に錠はない。むさと男の來ぬ處へ来たが不祥明日まで待ちや。ヤアそれでは私首がない。これ四十平殿お助けと。拍子木ならずをエ、かしましいく。拍子木おいて貰はうと取つて擲つて手をとつて。調コレ些とも大事な苦にするな。おれば此處の姉娘小萬といふ者。其方は濡ゆる薩摩を出て賤しい奉公するといふ。大名衆のしるし揃へ聞きなうも何ともない。地薩摩の戀の一通り。根から葉から聞かねば氣にかつて夜が寝られず。ひよんな咄を聞きさいて睡たうて眼がうづく。嘘なしに話さうか言はねばこれぢやと抓ら

る。調あいたく申しませう。私は鹿兒島で葦川源五兵衛と申して。親兄どもは小知を取り我等末子の是非もなく。來迎院と申す知行寺へ後住の約束。地十三の秋から豆腐茹弱念佛の外。魚類女類は口にもかけず。善導が法然の化身であらうと申した。父寺の旦那に濱の町といふ處。芭蕉布屋のお萬と申すは筑紫一番。和泉式部か小式部の化身とはめた小娘。地きやつが我等を見るたびに齋に參れば抱きつき。同藝へ參れば抱きつき。地めつた無性に抱き付けども此の方合點參るにこそ。和泉式部の化身めが此の法然の化身と。相撲を望むと覺えた投けてくれうと存じて。或時墓へ參つた處私は裸になり。長老様の緞子の袈裟腰にきつとしめつけ。サア御座れと抱き付いた。彼方もぬからず四つ手にくみ。汗水ながして組合ふとて。何やらさやくつづやいて。互に因果を晒屋の臼から杵とは此の事。まんまと法然上人が彼方の十念授かり。諸譯

の五十相傳受け四十八夜の常念佛。互に忍

ひ忍ばれて物三年は夜晝なし。千日の回向
まで一日懈怠も仕らず。是が知れいである

ものか沙彌が聞けば長老が聞く。兄が知れ
ば親が知り髪を剃さぬ其の内に。縛首打た

る、沙汰。如何も國にたまられず。お萬と
後の契約して十九の年に薩摩を出で。十方

世界をかけまはりお尋ねなれば身の上の。
願以此功德氣の毒なラシお咄。なりとぞ語

りける。聞さてもく可笑しいやうで悲し
い咄。其の人はお萬おれは小萬。身になぞ

らへて涙がこぼるる。國並びの事なればも
しや聞きやつた事もある。おれは肥後の熊

本。笹野三五兵衛様といふ人と後紐から縁
組あり。無事で御座れば疾うに肥後へ嫁入

する。地八年前に彼のお人病死なされた便
宜あり。一門衆も親達も盃はせず顔は見す。

方々もらひてある内にはやかたづけうとあ
つたれども。頑足なしに道を立て十二で小

癪な髪をきり。今で後家は立つれども若い

女子の可愛いと思や。つま戀ふ犬猫鳥翼。

蟲にも劣つて男の肌知らずに死ぬる。今の
様な咄を聞く度に罪つぐられ。當座にしや

んと嫁入てのければよいものを。阿呆な料
酌仕すごいて湯の辭儀は水になる。吸うて

も見せず心から養こじけの若後家。詞一字
違うて名もよう似た。三五兵衛様と思うて

其方をお萬に借りたが。なんと一夜は貸
す氣か。地お萬に受けやつた五十相傳此の

小萬に授けてたも。手を合せて拜みますサ
南無阿彌陀く。これなう南無阿彌陀ぢや

と身をもみしラシ笑止痛はし恥かしし。源五
も困りうろたへて。お萬が五十相傳は丸裸

で受けました。地夜は蚊がくふ明日と逃げ
んとすれば引止め。氣がつかなんだ蚊が喰

はう蚊帳へおじやと抱入る。いやぢやく
もお主の威光蚊帳打ちあぐる煽風。有明消

えてこれくく。これが安養極樂世界い
づくも戀の闇ぞかし地お氣に入りの林は

背より茶の間に寝たりしが。土戸に錠を忘

れしと手燭か、けてお寝間の次。御用もや

と立窺へば有明消えし襖のあなた。しめや
かな男の聲合點がいかぬ蚊の鳴く聲かい

やいや人に紛れないと椽先見れば男の草履。
サア悪性にきはまつた男は何者襖蹴破り飛

入つて。二ツ胸に斬重ねんと跳り出しが、
左様でないく。笹野三五兵衛ともいはら

、身が。は病死と披露して葬禮まで取行ひ。
あらぬ女の眞似をして。五年七年辛氣を碎

くも大事を思ひ立つたる故。地念願遂けず
本名あらはし小事に大事を忘れては。今迄

が皆うつけの沙汰一家一門武門の名折れ。
堪忍の場思案の場だまれく人や見ると。

もとの女でしやならく立歸る。お寝間
はいよく聲高く。今ぞ別れのさめごと。

エ、妬ましく口惜しきに下部の持つたる拍
子木あり。ム、ウ忍び男は下郎よなたとへ

望逢けたりとも。三五兵衛が女房を下郎に
ぬすまれ目前の女敵見遁しにならうか。日

頃塗つたる艶白粉のつやつくろひも入らば

こそと。裾捻ぢち上げて足くびも人に見せじと包みたる。紅絹地袋の色に出る胼太股いと黒く。女のすなる緋縮緬。足纏ぞと高からけフシ男の下紐あらはなる。地常にたしなむ紅皿も。今宵血汐の膝の皿鐵漿壺のくろがねも。心の鋼鑄おとし引寄せく、一刀。挿櫛筭こん小枕粉微塵になれと髪掻きなで。早速を踏んで駈出でしが。南無三寶刀は部屋の前取りに歸るは手のびなり。無刀でかかるは不覺なり。夜中半時の時計の聲フシ心せかするばかりなり。地ハア、彼の廊下を來る人は朋輩のおしゆんぢや。此奴は饒舌の轉婆め見付けられては大事ぞと。からけ下して前かき合せ。所體つくれば目の前に。元の林と奈良園扇空睡。りこそゆたかなれ。地おしゆんは何の氣もつかず林殿此處に何してぞと。いへばわざとびつくりして。詞ア、なんぞいの氣疎氣なお寢間が近いたしなめや。明日は月の十五日鐵葉つけて寢ようか。寢て待つ男もあらはこ

そ氣散じな獨癡。地爰で眠るも同然和女も往つて早う寢や。明日逢はうぞやといひければさればいの。詞今日ひよんな草紙を見て氣が騒いで寢られぬ。女夫事して寢ませう。今宵は此方さんお内儀にならしやんすか但し男にならしやんすか。地ア、どちらになつても思の種男とも女子とも。見立次第というて居るフシ下心こそわりなけれ。地いやく、どうでも女子が好い實可愛らしい女房ぢや。ならば男と生れて貴様と一夜寢て見たい。どうもならぬと懐に手を差入れて抱き付けばア、ほてくろし放さんせ。女子同士寢ようより一人寢て本の事。夢に見たのに徳があるとじやれに紛し逃入れば。私も夢の相伴とフシ追はへてこそは入りにけれ。地此の人音に源五兵衛あらはれては身の落度。お暇申すと駈出づる小萬押留め。詞覺悟あつてするからは其方に難儀か

いへどもいやく、お屋敷は如何もあれ。生國薩摩は人改めつよく我等は今にお尋ね者。此の事國へ聞えては召返されて罪科にあひ。一門の恥土萬が歎き塀を乗越え夜の中に。大津までもといふ處へ林はたしなむ長刀。裾ばし折つて捲り上げ奴殿動くまいと。縁端に躍り出でたるはフシ狂氣とならでは見えざりけり。詞ホ、ちと合點が參るまいこれ小萬。我こそ肥州熊本笹野三五兵衛。我二歳の時親三五左衛門は。武州の遊所にて石子久彌といふ者に討たれしを。幼少なれば夢にも知らず四歳で母に後れ。一門の介抱にて十四の年跡目を繼ぎお手前と縁を組み。迎へ取るべき用意の最中毎日門に貼紙して。狂歌俳諧さまざまの落書を立て。手中指さし嘲弄する。如何なる故と聞合すれば親の敵があるといふ。地弓矢八幡知らぬ事は力なし。敵石子を討取り此の恥を清めずば。本國へ歸るまいと譜代の下人に心を合せ。頼みし寺と内談しめ。三五兵衛病

死と披露し。鯨魚といふ魚をもつて火葬をあざむき。十六歳で國を出で髪をのぼし女となり。十九歳の九月より今年二十三歳まで。五年の春秋附添ひ見るに顔も知らぬ夫の爲。下尼の身となりまざく側居るとも知らず。朝夕我に香花とり精進回向歎きの様子。嬉しいやら不便なやら部屋に入つては泣暮し。名乗つて聞かせて嬉しがる顔見たいとは思つたが、いや／＼本望する迄と胸に包んでかす／＼は船車にも餘るべし。日頃にも似ず今夜しも彼の下郎を聞へ入れ。見苦しきさまは何事ぞあれ體の下司奴を。三五兵衛が女敵といも口惜し。況んや大事の敵を討つては無念も恥も悔えうと。心誓文立てたれども凡心の習ひ。目の前の怒り止み難くか／＼破つて出るからは。討ちとも無うても討たねばならぬ。一本指せばうぬめも男。サア抜け相手にしてくれん。エ、うぬめ等風情と太刀打は武運に盡きた口惜しいと。齒がみをなして歎きし

はステ道理せまつて哀れなり。調源五兵衛にこゝ／＼笑ひながら。ヤレたとへ王の息子でも。今草履取するからは下郎といはれてかまはぬ事。併し下郎を相手にするが無念ならば其の無念はやめてやろ。コリヤ音にも聞いたか薩摩の鹿兒島。菱川源五兵衛雀の餌程な米を取り。馬の脊骨も跨けた者。其方も昔は誰にもせい。當分女子で居るからはお腰元の林殿。女は相手にならぬといひたい者ぢやがそれも口真似童しい。但し女敵といふ悪名。髪きつた後家女に女敵とは無理窟ながらこれもしらべて益ない事。女敵ならば女敵如何にとしてもお手前が。親の敵に身を碎く此處が如何もしかられぬ。地脇差に手もかけまい女敵討つて門出祝ひ。親の敵を討ちめされ。それとても是非抜けならば抜かうが。身が國のならひで。抜くと鞘をききわり再びささず死ぬるが。是が薩摩の正銘。時には二人討死して。親の敵久彌たつた一人の仕合せ何の役に立た

ぬ事。これ御腰元女子家。女敵の首斬らしやんせサア。首斬つて取らせんと。人を人とも思はぬ顔フシさすがに薩摩者なりけり。やさ／＼武士の喧嘩に工面はいらぬ。鞘割らば割れ碎かば碎け。サア抜けと詰めかかる小萬隔たり押留めて。扱は三五兵衛様かいの此方を男といふことは。三年前から見たれども三五兵衛様であらうとは。もつとも氣のつく筈も無くわしやはまつたか是非もなや。餘の腰元は半季でも季を重ねれば打解けて。冬は同じ夜の物夏は同じ蚊帳の内。女子と女子の主従は肌を合せて寝る程に。じやれてんがうもいひ慰むそれに五年の馴染といひ。お果てなされた母様の鐵漿親にならせられ。おれとは姉妹同然に一寸側を放さぬに。如何なる事が夜に入れただ寝姿を隠したが。遂に側に寝た事なく小風呂に入れば風邪引いたの。物が出来るの何のとて伽に小風呂へ入る事なく。胸へさはるも嫌がつて兎角乳を隠したが

詞よろづ起居に心を付け見れば見るほど男ぢやが。さては此の小萬に執心かける奴さうな。悟氣するか試しの爲とわざと今夜破佛に誓を立てた道筋はゆがむまいと、暗がりに附聲して寝させたは外の者。源五兵衛殿を騙した此の詭言は幾重にも。身の明らかなる證據をと蚊帳打上げ手を取つて引き出す。お蘭といふお髪上げ髪もほどけて所體なく。顔を赤めて源五兵衛様。許して下さんせア、恥かしく袖おほふ。三五兵衛は詞なく手持無沙汰に赤面する。源五兵衛も胸つきしがちつとも苦しからぬ事。小萬様も女子此方も女子。人間の身に變りなし譬へば鱈鮓と切麥。汁はおなじ醬油。何方でもお振舞は同然なりとぞ和らぐる。小萬取付きわつと泣きこれ三五兵衛様。詞泣かずに言はうと思へどもどうも涙がとめられぬ。出来た仕様ちや御座んすまい。私明暮れ戀慕ひ泣き悲むを見て居ながら。

地ようもだまつて居られたなう。去年の春の大煩ひもこな様ゆゑといふ事は。看病なされたお前が證據。男は松女子は藤と元から壁にあるけな。松の力で藤もはふ男頼みに女は立つ十二の年から十九まで人の盛りを捨置いて假令道を守ればこそ。若し氣がそれていたづらしたらこな様斬つて棄てさんすか。さりとはつれない人。女房可愛がつたとて。ひけになるか恥辱になるか待がつたるか。八年の月日を取返しはなるまいと。思ひの限り息かぎりステすがりついで泣きければ。二人の男も理にせまり。泣くより。外の事ぞなき。三五兵衛涙を押し理とも非ともこればかりは。一言も返答なしそれはよし夫婦の中。源五殿への申譯腹を切らうと申すともよも切らせはなされまい。地すれは入らぬ化粧業何とも違却千萬といへば源五これくくお詞の中なれども。親の敵狙ふ身は盗みをしても許しある。何のこれしきお心にかけれ

な。詞さて彼の石子久彌といふ者は。只今名波道愚と申す雲水の身となり。或時は勢州に住まひ又は濃州信州。折々は京東山。勝軍地藏の隱遁者にちなみ。詩文など作るよし草履中間の咄なりといひければ。地有難き御物語。御恩の上のお情と。地喜び合ふこそ道理なれ。地夜もしらしらと白む頃家の首名磯部與茂太夫。寄親の四十年。中間四五人ひき連れ。路次口たゝいてこれこれ林殿。詞お部屋の方に男の聲が聞える。錠明けさつしやれ穿鑿いたす林殿。地林殿とぞどよめきけるそりや親爺めが來をつたと。あわて騒いで三五兵衛は奴振る。源五兵衛は女子の眞似先づ小萬様隠しませと。蚊帳へ入るやら駈出るやら。地中に差別はなかりけり。地中にも源五物巧者騒ぐまいく。渡り奉公した御陰我次第に遊ばせ。私お家に居ぬばかり何の氣遣ひない事と。いふうちにも戸を敲き下々わめければせんかたなく。土戸の錠を明くるとひとし

く與茂太夫つつと入り。さてこそ新參の縛
れく、れと取廻す。詞源五兵衛少しもひる
まず。いや縛らるゝ科は持ちませぬ。夜前
初めて拍子木役奥とも口とも存ぜず。戸の

奴ぢや。第一鼻が高うて合點の往かぬ面。
きつと詮議の仕様はあれどわきへ障ればや
かましい。これ四十平平ぐに大阪へ連下り
薩摩宿へ渡して舟に乗るまで見届け歸れ。

薩摩歌

明いてあるからはと而も念入れ廻る處。女
子衆が見付けて此處へうせたは曲者夜明ま
で留置いて。首名殿へ渡すとて錠を下して
動かせず。地蚊にくはれて居ましたが。そ
れでも縛らばお縛りなされと。さも有りつ
べしう言ひければ三五兵衛合點して。調い
かにも彼がいふ通りわしが龜相で。錠を忘
れた其の間にお庭に來て居ました。勝手知
らぬといひ乍ら後で知れては奥の者の過
り。地夜明けて此方へ渡さうと錠下して留
めました。何の別儀も無い事と。何れも武
士の一疋どもフシ尤らしうぞいひなしける。
詞與茂太夫頑い者。何も奥の道具に見えぬ
物は御座らぬかよう吟味なされたか。地
イヤ何もお道具揃うて胡散な事は御座らぬ
と。いへども猶顔をしかめ。調汝は好かぬ

が鼻が高けりや此方がねめる筈か。一步は
其方の一步鼻はおれが鼻。地それ返すと投
出す三五兵衛も我が身さへ。世を忍ぶ身は
詮方なくこれそこな者。其方も人の一大事
詞の役にも立つたであらう。さきの人が侍
ならば其の恩は忘れまいと。心をふくむい
ひこなしお蘭は奥より走り出で。調これ待
ちや待ちや此の鼻紙入鼻紙。中にお錢もあ
るさうなお庭に落ちてあつたが。地其方ので
あらう持つて行きやと仇の契りも仇にせず。
心の底に結び置く。フシ露のなさけぞ哀れな
る。地源五兵衛もほろりとなり是は如何に
も私の。お志は薩摩でも一生忘れは致すま
いと。お寢間の方をじろりと見てほんに切

中之巻

が来る。夫で餅を搗かしやる。臼も杵も入る程にまあ仕舞うて歸らしやれ。今日の働き半日拂にせうけれど。なまなか半手間取らうより頼みの祝に皆進上にさつしやれとお内儀様のいひ渡しと云ひ捨て入れれば皆々あきれて。何と事介聞いたか。其方が出入の旦那ぢやがあんまりな怒づら。おまん様の頼みが来るなら祝儀は上から賜る筈。其の日過ぎの半手間を食つて何程ぢや。それに今日はおまん様。本の母御の十三年忌茶の子一つ配る事か。おまん様がいたい云うても一人の娘御。彼の名の立つた源五兵衛殿とやら尋ね出し。物さへ入れ、ば成る事。方々首尾を繕ひ。俎に取つて世を渡いたが先づ順といもの。定めて頼みの来た方も大分取れる見込で。奉公分といふであらう。地其の跡へ銀持つて来る男の子を養うて。又銀の付く嫁を取り舉句に主の連合も追出し。銀持つて来る亭主を入れ。悪うしたらば内外の者も置きかへ銀持

つて来る奉公人。數銀する手間取りを尋ねられうも知れまい。傳兵衛のお方如何思やるとどつと笑へばヲ、それく。おお蝶の父のいやる通り一を打つて萬を知れ。琉球屋の新兵衛様といつてはお國はおろか。筑紫九箇國隠れない分限者に。餅搗く臼杵持たずに晒白を兼ね程な吝嗇坊。あの心で餅搗きやるは不思議でないか事介。いや白ばかりに限らぬ。萬の物を一色で二色三色に兼ねはらる。先づ主の身から新兵衛様を押退け父母の二役。帷子時も前垂で上下共に仕舞はらる。入相時分に膳立して夕飯夜食を引つぱり。火掻がすぐに塵取砂櫛桶に柄をつけて。極杓を遂に買はれず。狗見仕入れて鼠捕らせ。盗人の用心と一定で埒明け。冬は時々蒲團代り欠伸もそつにせまいとて。口開き序に念佛精進日には和物一つ。其の和物の挿木の。頭の圓いを長老の代借で仕舞はらる。慈悲ある者の眞似はせず。吝嗇者を手本に杓子を定規に使は

る。正月の飾が釣瓶繩になるやら。七月の芋殻が壁下地になるやら。念佛講に當れば熬豆ついでに灸して。來月の庚申も取越したいとのつぶやき。それに奇特な如來様がほしいとて佛師を呼うでの好み事。右の御手に錫杖。杖左の御手に縛の繩。腰から下に緋の袴御頭には烏帽子着せ。地蓮華の代りに米俵御面鏡を眞赤いに御口をくわつと大髭阿彌陀如來一體で。不動地藏聖德太子。惠比須大黒闇魔王。しまうて胴の中を空胴に刳つて二月堂の牛王と。お伊勢様の御穢入る様にとの誂へ。佛にさへ油断させず責め使ふ和郎ぢやもの。衆生を責めるは道理ぢやとオクリ口々へそしりて歸りける。地琉球と家名を聞けば唐めきて。君は和國のほつとり者おまんは千々の物思ひ。七つで離れて母様の十三年忌が二度はなし。お墓へちよつと加賀笠に小風呂敷には手向草。露も涙も押包みなう竹。大機ながら是持つてお寺まで供してたも。參つて來たいとい

ひければ、お袋様に問はしやんしたかわしや喚かれたら何とせう。今にお前の氣に入りの事介がおじやりましよ。事介つれて御座りませ。地いや事介はちとお寺に障す事ある。母様の今藏に御座る間にはやう出たいといふ所へ。ア、これ／＼母は今藏から出た。動く事はなるまいと笠風呂敷も取つて投げ。參らしてよけりや參らする。

今日はそなたの嫁入の頼みの使來る筈で此の中女夫が用意して餅よ杵よと世話かくが其方の目には見えぬか。産み落した母御前も七歳の年まで養育。それから此の方十何年といふものは。誰が世話で其の様に脊丈のびたと思やる。地十月の宿こそ貸しはせね思くらべをして見たい。本母御前から釣を取る。地獄にやら何處にやら見えぬ孝行せうよりも。これ鼻の先にぎろつく此の母に孝行なら。寺も精進も取置いて。今日にはつこり笑うて生臭物で祝うてたも。其の代りに來年は祖父様の三十三年忌。そ

れと一度に荷うてそなたの母御は十四年忌、一年でも多ければ弔はる、佛も徳。此方も難作が少ないと差す手引く手に算用なり。地何時もの事なり。親ながらおまんも餘りこたへかね。もう好い加減に黙らんせ。他人でさへ恩ある方親しい中は精進して。寺道場へも參るのが先づ道さうに御座んする。腹を借つた母様の十三年忌の墓參りが。

それ程科になりますか第一はこな様の。外聞更加もあるものと寺へ上げるお布施も。皆此方様の志に書付をしました。嘘なら風呂敷見さしやんせ。死んだ人への回向は此方様への孝行。此方様への孝行は佛への奉公母といふ字は同じ事。わしや別け隔てはせぬものを。又しては／＼さしてもない事苦口いうて。我も瞋恚をもやしたり人にも惡氣附けさんす。精進すなら篤ますまい寺がいやなら參るまい。子は親次第の者なれど縁の道ばかりは。押付業には成らぬ事頼ひとりたか取らしやんせ。わしや嫁入はし

ませぬ。せめて十に一つは父様にも問はしやんせ。母に向うて口過すも皆此方様がいはしやんす。餘り氣強う御座んすと。袂を顔に押當て、恨み、フシ歎きの其の中にも。地今日命日の亡き母を、フシ慕ふ。涙をまさりける。一期男持たずに居やるかどればさせまい。一期男持たずに居やるかどれば見えよう。地テ、いやさうな顔ぢや。わが身の好きやる男はおれが嫌、親の許すは和女が嫌ひ押付業はしますまい。追付け頼みが來る筈投げ返いて見せうぞと。わめき散らす折下袴に媒人が。袷羽織も鹽目好き大鯛昆布柳樽。五色の縮緬紅絹真綿附紙臺折紙臺。三荷に荷はせ先づ萬事首尾なつて。

私迄大慶と昇込めば女房。今迄夜又の忽ちに愛敬柔和の高笑ひ。阿まあ／＼是は是は夥しいなぜに留めては下されぬ。さりながらあなたも代が一度の事皆お仲人のお世話ゆる。これ姉お禮申しやいの。彼の子も今朝から悦んで。待受けて居ましたが恥か

しいと見えまして。地 つれあひの新兵衛奥

に待受け居られます。先づ彼へお通り供の

衆は端の間へ。調男どもは何處へ往た事介

はうせぬか。地 これおまん目を拭うて鼻で

も龜や玉よ。此の進上物持つて来い。それ

茶の下を吹きはちやつと酒屋へはしりに水

が無ささうな。吸物に何を醬油かいやざつ

と薄味増を。鯛炙れとやがましくオクリ連立

ちへ奥にぞ入りにける。フシおまんは胸も。

地せきかへりサア頼みを取つてはもう通れ

ぬ。わざくれやけぢやばれて出て。忍び男

の構ひがあるとうんといい捨てうか。い

つそ内を走らうかいや源五兵衛様も日

蔭の身。其の上に苦を持たせてはいとしい

人の身の大事。談合もするものを今日は如

何して見えぬぞ。父様を呼立て變替して貰

はうか。内の者は身にならず心の合うた友

はなし。何とせうやら彼とせうやらやるせ

涙に氣も寒がり。座敷の内をうろうくと

ば奥の間に。千秋樂は民を撫で。萬歲樂

には命をのぶ。相生の松風さつさ。お暇

くと。奸い機嫌にて媒人は。足もひよろ

くと立出づる新兵衛も送つて出で。兎角目

出たいお目出たい。おまん様追付け好い殿

持たせませうお内儀様と申します。兎角目出

たいお目出たいと。フシくだを巻いてぞ歸り

ける。地母は酒氣に猶氣強く何とおまん見

やつたか。安う積つて百兩足。なんほ四

の五のいやつても。我が身の細工であれ程

の男はちつと持ちにくかる。地皆仲人の肝

精親父殿の名代に。仲人へ禮に往て氏神へ

も參つて来う。どれぞ暇な女子ども。供を

雪踏よ綿帽子よとオクリ。引きつくへらうて

ぞ出でにける。地おまんは母の町内を出離

るまで見送りて。門口より走り入り父様

ははどうぞいのと。膝の上にかつばと伏し

フシたえ。入るばかりに歎きしが。地育て

し恩があればとて縁の道は格別ぞや。殊更

んに無縁の佛の日出家の一人も供養せず。

お墓の花も枯れ次第持佛の香も消え次第。

ざんざん所ちや御座んすまい但し今の母様

の。仕様が好いと思うてか嫁入りは思も寄

らぬ事。重ねていうても下さんすな。いつ

そ死ねなら死にますとステテ聲を上げて。泣

きければ。新兵衛も涙にくれ我が子の心底

恥かしい。今の母に目がくれて死んだ母を

忘れたと。思ふ恨か。フシ恨めしや。今日は

往なさん追出さんと幾度筆は取りたれども。

地堪忍せしも子の可愛さ。七歳から馴染み

たる彼めさへ彼の辛さ。地跡に呼ぶは猶以

て馴染は薄く氣兼して。互に隔てもある時

は。ステテ苦勞に苦勞を重ねべし。地世話の

醫にいふ如く。眞の母の折檻より隣の人の

扱ひが痛いといふは誠ぞや。地如何なる賢

女貞女でも乳房の母には似もつかぬ。かう

いふ我も其の通り若い時分は色もあり。頭

に雪を頂いて寢覺がちな夜なくは。幼

よ。此の度の縁付も一旦心に從うて。三日なりとも居て戻れ。其の上では如何様とも望の通り違へはせじ。さら／＼彼めがひるきでなし兎角心に逆らはす。可愛がらせう爲ばかり。今日の佛が不便やな。預けて往んだ此の娘。何とて粗末に思はんとスエテすがり付いて泣きければ。地それなら是非に及びませぬ必ず／＼苦にもつて。煩うてばし下さんすなど。親子手を取り縋り合ひフシ泣き。叫ぶこそ。道理なれ。圓こりや／＼戻つて見をればやかましい。縫物でもして居や。酒の上に泣いたればア、地いかうふらつくやあゑいと。手枕すれば少ととろ／＼となされませ。私も其の間に事介の頼みやつた。洗濯物つい仕立てやりましよと。取出す我も其の人も。互に思ひ變らじと神に誓を掛針や。此の血を染めし指貫なりと思へば心みだけ絲。過ぎし其の夜を忘れかね思ひ切りかね捨てかねて。心の底に包み綿落つる涙の絲筋に戀を。箱込む

哀さよ。地事介は頼みの使ありと聞くより堪り兼ね。嗜む一腰ぼつこんで。覺悟極し顔色門に駈入り。おまん様これ來ましたとばかりにてスエテおろ／＼涙で立ち居たり。地おまん嬉しくハアおじやつたか先づ上りや。母様は留守父様は寢轉んだばかりで。ろくに寢入りはなされぬぞ物をいやらば密そといや。地お眼が覺めれば悪いぞと目ませ願き知らせけり。事介聽て合點し。圓今日は御縁付の極めがあると承り。お出入申す私が。お前の嫁入をおめ／＼と知らぬと申すは一分立たず。御心底を聞届け其の日出度いお座敷の、お茶の給仕を地これ愈爾所をまつ此様に。お給仕でも致さんと脇差さして參つたが。はや御祝儀は相濟み御縁付は極つたか。早う聞きたい聞きたいとフシ胸なで。擦るばかりなり。地いかにも出入の門の事其方に知らせ取持つて貰はずば。残り多く腹も立ち無念も嘸と思ひやり。さまん／＼心を碎きても先づ一旦は縁付に通れ

がたなう極りし。嫁入する日は死出立ち葬禮の儀式と聞く。此方の胸は死用意嫁入の供をしてたもらば。其方も定めて死扮紫此の誂への縫物も。其の心得に仕立つれども心の底の箱丈は。昔も今もかはらぬが彼の袖下のいひかはしいよ／＼一尺一寸も。引がぬ合點か。フシ聞きたいと。縫物に事よせて問へば答の返し縫ひ。心通はず端縫のオッリ詞の縁こそ哀れなれ。フシ我もそもじも。わきあけの。其の袖形の箱肩もオクリ何も。彼も未だ。はつしの絲のいとし。とまでに。フシおもはくの。針の本末覺え初め。たがひに心懸袖の縁に。より絲く／＼り袖。スエテ針目人目と思はねば。木夫親のしつけもよしや只。とくな解かじと仕立てしに。綻び易きならひとて誰がみみづに。聞傳へさがない浮世の袖口にかけて裂かれてあぢきなや。文の音信言傳も。冷泉ヲ誰れつき。あてず。中絶えて。何時しみ／＼と久し振

かなき。ものは女の身親の。詞にしたがひ
の餘所の小褌に。纏ぢられて、フシつらや悲
しや。忍び泣き涙小針にしくくと。まば
らくくにフシ縫ひこぼす。ワキけにことわ
りやとても肩身ばかりかうかくと。存ら
へはつる身巾なし。オクリ縫込み。廣き身で
もなしかたの悪さに裾切れで。フシ人を恨
みん道もなし。江戸地思つた事云うた事今は
仇なる逆杆。三寸落しに裁切つて。此の世
の契麻絲なれど。來世は長き絲卷を繰返し
ては繰返し。燃れつもつれつ合せ絲。六道
の縫目待針して。フシ手はおそくとも待
ちぬべし。太夫地ア、跡も結ばぬ絲筋の。一
筋先へ抜けんとや。一人残りてまだくと
誰を相手に裾合せ。針道違ひ着にくしと。
手づつの浮名は。フシ取るまいとよ。ワキ地扱
は頼もしなまなかにまた着換へなき此の生
は。五尺に足らぬ襟落し狭き浮世は何かせ
ん。太夫戀にさはりのせき縫の。ワキ積る思
ひを。太夫肩あけて。太夫ワキ同じ刀にたち

違へ。一つ枕に伏纏して。三途の川の脊筋
にて。太夫結びとめましょ。ワキ縫留めまし
よ。太夫ワキ留めて。とまらぬ涙の絲裾を引
合ひ褌を引き。二人がなげき諸共に。スエテ
たみ込めつつ。泣沈む。フシ世にたよ。りな
き戀路なり。地時しも表に念佛も錠の響もあ
はれけに。ほそくと女の聲。聞これは
上方より諸國を巡る修行の尼。草鞋の價頼
みますと。地聲付卑しからざりけり新兵衛
起上り。イヤア事介來たか。あれ一錢取ら
せといひければなう父様。母様のお位牌
に念佛一言手向の爲。彼の修行者持佛堂
へ呼入れても大事ない事か。テ、氣が付い
た奇特奇特。殊に比丘尼の事といひ。雷
奴が戻つても大事ない事。地それ事介呼び
入れよはいといふよりおもてに出で。見れ
ば京の屋敷にて假の契りのお蘭なり。互に
はつと驚く顔事介ちやつと我が身を陰に。
かぶりを振つて口の内。何もいふまいいふ
まいぞゑへんくと知らずれば。心得うな

づく目許にも。フシ浮ぶ涙ぞ至極なる。聞こ
れ内方から志がしたいとある。此方へくと
と案内すハア御免なりましたと。地笠を脱い
で腰かくるおまん茶を汲もてなして。聞
若いお人の上方から筑紫の果まで修行して。
發心の因縁は如何した事か知らねども。今
其の身には苦もなうて羨しう御座んす。ほ
んに此の世の佛ぢやといひければ。あのお
しやんす事わいの。苦は色かゆる松風通り
風の吹く様に。身にも染まぬ一時戀。物い
ふ間もない仇男と。地初臥の轉寢後も
前もない戀なれど。お前様も姫御前。女の
はかない心から二人に枕交すまいと。思ひ
初めたが善知識。髮容つくつてさへたかの
しれた私の嫫致。衣を疊に頭を圓め戀
慕はれうと思はねば。地いつそ氣樂で何れ
佛では御座んする。されば佛は石上樹下と
て石の上。樹の下蔭のやどりも厭ひ給はね
ば。岩が根枕氣散じながら寢覺くとどう
やらすれば。彼のあだぶしの因果めが煩惱

を起させますと。餘所に語りて事介をフシ尻目に睨むぞ氣味悪き。地事介も迷惑さエエ、こゝな佛殿。問はず語りせぬものぢや。地近頃佛とも覺えぬ人ぢやといやがれども。

新兵衛氣も付かず菩提の縁はさま／＼殊勝にこそ存ずれ。問今日は我等が先妻の忌日。彼の中二階の持佛に薫爇連清と申す位牌。あれにて念佛御回向頼みます。地それならあれへ通りましよ。いざ／＼あれへお通りと二階へ上れば新兵衛。事介頼む何ぞ一種で非時をせい。さらばお布施を包まうと。フシ奥の間にこそ入りにけれ。地一階を見上げて事介エ、打見には殊勝らしく。話を聞けばいたづら者信心がさめたれど。非時をせよとのいひつけ豆腐でも取つて來うと。起たんとすればおまん取付きコレ待たつしやれ。地彼の尼は内々咄にはしやんした。小萬様の侍女お蘭であらうがなぜだまつて隠さんす。但し私があのお蘭を取つて嚙まうといひましたか。如何いふ心で御

座んすと問詰められた顔を赤め。ム、今の尼の咄が蘭が噂に似たゆゑに。其處を以ての悪推か。イヤ是はいかいはまり。彼のお蘭があの尼程見えれば薩摩へ戻らず京に居る。床から出た顔見せたかつた。地頭は赤熊猫背鳩胸に顔は猿。まらつとで癪になる思ひ出すもなういや。暗がりの商はせう物で御座らぬと。まぎらかし出づればいや／＼いはいしやんすな。夫ならなせ門口で咳拂して首肯あひ。何もいふまい／＼とは何の事で御座んした。地命をかけ身を捨て、親に見返る男なれば鼻息にも氣を付ける。低ういうたら聞かまいと思はしやんすが不覺の至り。過ぎにし事を輪廻深くいふ氣はさら／＼無いものを。問はれてもまだ隠さしやんすさほどに隔て心を置き。未來までとはよういはれたお蘭が來たも皆あひけん。つもられた騙された逢ひ初めし時の誓文を。金輪際と思ひ詰め男を大事にかけるゆゑ。今の母に逆らひて常々疎み憎まる。

袈裟まで憎い世の譬へ今日の年忌の佛まで憎まするは我が戀ゆゑ多くの罪をつくり。皆徒に成り果てた死んだ跡では彼のお蘭と。心やすう添はしやんせわしや死にますと事介が。脇差抜いて我が胸に突通さんとする所をこれは短氣と飛びかかり。地柄に取付き。これ／＼今日の日天御照覽少しも隔つる所存なし。思ひがけなき處へ來て我も當惑したる上。氣にかけさせて無益と思ひ先づそで無いというた分。地隠し逢ける心でなし前後の間分なう。氣が短いともぎ取ればフ、氣が短うて鈍な事。見ながら生きては居られぬと又取り付いつもぎ取りつ。競り合ふ中に母親は表まで歸りしが。内の騒に心をつけ暖簾のかげより覗くとも。更に白刃を奪あうてやう／＼男もぎたくり。手許に置かじと力に任せ投ぐる拔身が一はづみ。二階比丘尼が小腕にきつさきはづれにすつばと立つ。狙うてはよも當るまじ。障子にさつと生血引て。朱に染まれば兩人

の口説もわきへ興さめてフシこれは。く
と騒ぎしが。地されども淺疵かひくしく。
二階の梯子ふみとよろかしこれ源五兵衛殿
おまんだの。詞さすがは田舎夷よなう。男
に執心ひかされて尋ね來たとの惡推か。執
心残る程ならばあたら姿をむごたらしう。
木の端と窺さいでも人は情の心の花。花の
匂ひに引かれては深山谷の奥までも。離れ
難なう慕ひ來る戀路ととも其の如く。地此
の胸一つ据ゑたらば源五兵衛殿で御座らう
が。業平殿で御座らうが戀の絆に繋ぎ留め
。物の見事に添うて見しよ。詞されども國
のおまん故かうなつたとの物語。我が身の
事は思切り其方に早う逢はせたく。路銀ま
で取りしつらひ其の上にも其の中は。地何
とかなりしと氣懸りにてとても捨てたる此
の身の果。修行がてらに餘所ながら戀には
味方のほしいもの。役には立たずと力にも
やと八重の汐路越え渡る。都女の戀の仕
様見習うて手本にしや。詞それに双物を授

打してだまし討に殺さうや。コレ其方の手
では得死ぬまい。地サナ源五兵衛殿尋常に
お手にかゝれば身の本望と。脇差抜いて手
に持たせ。泣きわめいて武者ぶりつく。お
まん引退けこれかしましいしちくどい。詞
都の上方の聞きともない置いてたも。西國
の筑紫のとて情の道に變りはない。そなた
の様にいふならば。西國はまだしも唐には
戀はあるまいか。地これかうならんだ妹背
の中其方の様な女房が。千人萬人妨なし
汗を入れても離れはせぬ。何が邪魔で殺さ
うぞ怪我にあたるは其の身の不運。いはれ
ぬ處のお見舞から。都衆の戀には手傳が入
るさうな。薩摩の戀に味方は入らぬ早う出
て往ね。腰が起たすば綱つけて引きすり出
すがうせまいか。いや張合になつたればか
う居た處を動きはせぬ。オ、いごかすとも
いごかせうとフシせり合ひ捻合ひ立騒ぐ。
地新兵衛かけ出であたり隣もあるぞかし。兩
方だまれ鎮まれと制すれども聞き入れず。
母親始終を聞きすましまし水汲扱押し取りのべ。
せりあふ中を容赦もなく鎮まれ片端に。
撲ちするてくれるぞと叩き廻りし勢は。
只山姥の山廻りフシ舞ひをこなうたる如く
なり。銅鑼の様なる聲あらけ。詞エ、親
父殿がなまぬるし括し上げて置きはせず。
彼奴等が口説の場屋の亭主になる氣か。や
い事介。おのれはお尋ねの源五兵衛。大事
の娘をそゝのかし塞りの此の國へ。前髪落
して態をかへ又彼の子に惡氣を付け。人の
目をくらますは人買よりもの太い奴。地た
ゞさへお國は人改め汝ゆゑに此の内は。月
に一度の判をする。見知らぬとて是非もな
い手前にふだん飼ひ置いて。外から上へ聞
えては同罪といふ一筆の身抜けがならうと
思ふか。詞御吟味所へ引渡し牢へ入るは
やすけれど。おまんが心底はかつて腹をか
さぬ母ゆゑに。世間内證義理一つで沙汰な
しに往なするぞ。地尼めも共に出て失せう
と常わんざんとは事かはり。道理至極に返

答なくおまん涙に正體なく。源五は手を突き頭を下け、詞元に越度ある上に重ねくの誤り。如何様になるとも御恨みとは存せず。地只御夫婦娘御の御難儀のなきやうに。兎も角も御計ひと差俯向いて居たりけり。詞情ある新兵衛も私ならねば詮方なく。疾くにも斯くと打明けて仰せられれば何とぞ思案も致さうもの。地近頃残念氣の毒といへばおまん縊りつき。とても慈悲の上からは私も源五様。一所にやつて下さんせ拜みますると泣叫ぶ。母はいよく腹を立て。汝が一所に出て往んで。頼みを取つた契殿へ此方とは死んで見せうか。それ親父殿奥へ連れて往かつしやれ。事がのびれば尾緒がつく男どもは居らぬか。此奴が宿は坊の津にあるけな。家主へ渡して来い。地心得ましたと引立つる。おまんはわつと聲を上げなう源五様お蘭と連立ち御座んすの。ア、羨しい腹の立つと。恨み歎けは源五兵衛往きたうては行きませぬ。今

此の庭でさつぱりと死にたいわいのとばかりにて。ステテどうと伏して泣沈む。地手あらき薩男の無意氣者死にたくば我が宿で。たき殺してくれうぞコリヤこれを見よと振上げて。振廻したる坊の津や棒づくめに三重へ送りける。フシ何時の間に。地日の暮るゝとも夜の更くるともおまんは分も正體も。泣きつゞけなる嬬鳥親のしがらむ背戸門に。人目の網のしければ魂ばかり飛ぶ鳥の。翼折れたる如くにて屋敷の内を此處彼處。逃出づる隙間もがたと奪ね廻れど常々に。用心くはしき屋造りのフシ風の通ひもなかりけり。地見付けられたらそれ迄と布織の下機取組みて。庭木の松にもたせかけ我が身ながらも恐ろしき。智慧の梯子を上るにも盗みする氣のかくやらん。ふるひくもやうくと。枝に取付きフシ屏の上へはあがりしが。周囲は用水底知れず幅一丈の堀切にて。下るゝに足手のかかりなく飛ぶこと難き石垣なり。此の上は思案もな

し思切つて飛んでのけう。水に溺れて死んだらまゝ千に一つも神佛の。力もあらばと思ひきりひらりと飛べは南無三寶。帶を松に引つかけて宙に下つて是も彼の。鼠にかかりし野邊の雉子。フシつまゆゑにこそ苦しみけれ。地かゝる處に如何はしけん。お蘭比丘尼は紛れ來て締めたる門口見世格子。覗きありき裏へ廻つて此の姿一日見るより。はつと驚き怖氣立ち。フシ念佛申して居たりけり。地おまんは夫と見るよりもヤア汝は又來たか。思ふ夫に添ふがらは言分はあるまいが。我に恨が残つて殺さん爲に來たよな。地口惜しやこれを見よ内は忍び出でたれども。兎角男に縁ないしるし其方が手にかけていでも。しばしの知死期を松が枝の折るるまでの命ぞや。調定めて源五様も同道と覺えた。鐘はあるまい竹の先に小月でも結付けて。夫の手にかけさせて殺してくれよ。地エ、苦しや身がしまつて息切して。ア、苦しやと悶えしはフシ目もあて。

られぬ風情なり。地なう勿體なや我等に左

様な悪心なし。もとより源五様に露心残さ

ぬ上。今日御二人の深い中そもやそも此の

尼が。半時も男の側に居ては女の道立たず。

三衣の罰も恐ろしく此の世では源五様に逢

ふまい見まいと鉦を打ち。明日の夜明に上

方へ幸ひ出船の件もあり。夜のうちに港まで

と思ひ立ちしが待てしばし。おまん様は如

何してぞ力にも成らうと申した一言。嘘に

はせまじと來た證據。死なせはせまい聲高

に暇取つて見付けられては一大事。何とし

てがな下さんと駆廻つてこれくたんと晒

布が干してある。此の端をきつと結び付け

此方は此の木で留て置く是をたぐれば樂々

ぢやと。地石をおもりに結び付け。投けても

如何とよくべき。力の程も白布のフシ松に

かゝるぞ仕合なる。地おまん嬉しさ恥かし

や疑は御免あれと。伏し拜みく布引絞り

フシ松の木に。しつかと括り付けければ此方

は尼が締付けて。しつくりの木に留めてけ

りおまんは片手に布を取り。片手を廻し松

の木に懸りし帯を引き放し。左右にたぐる

布引の瀧津心の胸をどり。目眩ひ氣も消え

絶えぬの雲の通路天津風。尼がせくまい

くの。聲を力にやうくとオクリむかふの

岸にたぐり着く。地サアしてやつたあぶな

やと抱き下せば夢心地。ア、正眞の生如來

是が誠の善の綱。お禮は何と申さうと泣拜

むこそ道理なれ。禮をいふ間に夜が明ける

所の人に教へるは。釋迦に經か知らねども

陸を往けば遠うて追手の氣遣ひ。九里の渡

しが近いけな一足なりとも早いがよし。此

の尼は今生で逢ふ事は是迄。一所不住の出

家の身互に便りも是限り。早うくと別れ

行く仇を御恩の情人。名残はつきず上方で

芭蕉の布を見る時は。形見と思つて下さん

せヲ、こな様松葉の相生まで。わしや一人

寢の芭蕉布御恩生平の目も詰る。涙に袖は

半晒今ぞ一期の織留と。互の心太布の名残

は一反裁切つて。二丈六尺五尺の身戀にさ

らすぞ 三疊 哀れなる。

源五兵衛おまん夢分船

歌 源五兵衛何處へ往きやる。薩摩の山へ。

後はおまんが。涙の海よ。船もおされず。

櫓棹も立たず。寄邊尋ねてうか。うか

くこがる。源五兵衛こがる。高い

山から谷底見れば。布を晒すは。夏こそよ

けれ。おまん心は沍寒の冬か。雪の面影ち

ら。ちらく忘れぬ。源五兵衛面影

フシすがたは四季の花なれや。時折りく

にはやり行く。山ぞ伊達者の山葛。引手か

すく數ならぬ。フシオクリ心の種の。笹舟

にフシなさけの上荷。はねられて思ひは。沈

むヤツサ。やつさくの空槽の音もオクリ耳

に。悲しく遠さかる彼の故郷へ此のまよて。

フシ又歸らじと思ふにも。是が此の世を出船

ぞと。親を恨みの目は涙。地何に生れん蝶

川松のむらだち夏樹立。歌櫻島人打群れて

サンサ沖。に網曳き釣たる。波の雄波を。

かきわけく。走る兎の名所ぞや。フシよ、

鷹野ののがれ来て。遊ぶ野雁や鷺鷥。筑紫の妻を都鳥ありやと問へどいかにとも。

牧の野馬の馬の耳オクリ風福。山の渡守我が思はしらすけに。舟もうしほ。フシも引く方に。下り行く濱は。速日の岸高千穂の嶽高けれど。高い聲せぬ二人が中の。契は此の世後世山かくす。ほど猶フシ世にもれて。誰牧聞の。神の氏子の神歌や。歌へおらは知らぬが子供等が呶す。おまん寢處に足や四本となんしよばへ。寢處におまんおまん寢處に足や四本となんしよばへ。フシ諸ふ一節。舵の音登の友呼ぶ聲までも。此方が浮名のうはさかと餘所のひがごと焚付の硫黄が島は一霞。流され人のあの島でフシ流す卒塔婆も立つ。波によりくるくよりくる糸は。くまの三筋が。流れちりつる。ちんりちりつる三味線の。フシ渡り初めにし國とかや。ステテ琉球國に打續き。歌へ薩摩や。三が國に。霧雨が降らばよな。それぞ立つ名のうき。雲のフシ雨の。杜とて

ぬれて行く。袖は風の吹乾かして。顔は涙の水鏡ア、あれ。あれ。肩の引墨べに落ちて。髪はばらばらみるめ和布に。もつれみだれて何時節の齒の歌へ。櫛になりたや。ヤレサテ薩摩の櫛に。諸國娘の。ヤレサテ手に渡る。どうがねの。よんぢり嫁御はよい嫁御。此のなんくこの。よい嫁。あれ見さいな霧島山の横雲。此のなんく此の横雲。横雲の下こそ俺等が親里。此のなんく此の親里。妻里が夜の間近くなれかし。此のなんく此の。フシなれかし。戀しき方も。近くなれ潮みちくれば水馴棹。長き日影もほの曇り心づくしや氣づくしに。暮れぬさきより我が心夕暮の關眺めやり。眠る鷗に誘はれて。うたゝねぶりのふらりとステテ船にゆられて睡るらん。舟人も。睡りこがれ行く。地そも一睡の假枕皆一心のむすほふれ。夢を結びて荒磯海夢か現か。幻か。更に分ちも七流れ流灌頂血の上の。亡者浮ぶる法の水。オクリあはれ

に。もまたユリフシ不思議なり。地導師のお僧鉦打鳴し。地釋迦は去り彌勒は未だ世に出ず。彌陀の悲願を頼まずば何時か火宅を出船。乗りおかれては誰か渡さん。南無阿彌陀佛。南無阿彌陀佛。南無阿彌陀佛。如何なる人の何故に。又の上の往生か産のあら血か世の中は。餘所の事とも思はれず語り給へと尋ぬれば。誰がいふとも浪の音巾ふ人は琉球屋。おまん申す姿の花夫源五の手にかり。消えて散つたる血刀の。法の誓もあさましや其のおまんとは我が身の上。娑婆か冥途か如何にと。ステテおほつか涙せきかぬる。浮世の恨み葛の葉のかへす刃に腹搔破り。男は晨女は宵。一夜ばかりは隔つれど末の逢瀬は一筋に。流れ寄るべの水施餓鬼。フシ語るも我が身聞くも我。地心一つをいろく。む。す。ぶは有漏路とくれれぬ沖津風濱風。潮風さつ。く。さつと

して覺め行く夢のあと見れば。ありしは。浪の音どう。どうとして。海上空しく、フシ渺々たり。地おまんは驚く舵枕我が身は元の我が身に。覺めても覺ぬ夢心地。淺瀬の波に下りひたり歎きの聲に舟人が。舵取直す面舵の思ひまはせば夢なりけり。心もとなや我が夫に怪我過ちの知らせの夢と。かつばとまろふ兩袖に涙も潮も満にけり。夢違へしつ轉じ反へ心も波も立騒ぎ。窓は上る山嵐吹くや追風のそよぐと風のいろはに帆を上げて。走り行方は薩摩湯沖の雄波にあこがれて。たより渚に立つ雌波身を碎くこそ三重ふびんなれ。フネ尋ねめぐるや。地はう坊の津鹽の辻なる裏貸家。かねて開置く目標あり嬉しや此處ぞと走込み。詞ア、これは源五様死なすにまめで御座んすか。地先のが本か是が夢か。どれが夢やら誠やら息が切れた水一つ先づ飲。ませて下さんせとどうと伏してを泣き居たる。地源五抱上げ水含ませ。

ようこそく心底届いた満足した。此の上からは親里の首尾は兎もあれ角もあれ。首は首胸は胸甲が舍利になるとても親の手へは渡すまい。落着いて氣を顧めやと背中をさすり撫でおろす。おまんも少し笑ひ顔此方様の顔見たりや。胸も大方しづまつた氣遣して下さんすな。詞さてく愛い目辛い目や身の一代に覺えぬ事。裏の高崩飛びぞこなひ堀へ落ちて死ぬる場を。お爾比丘尼は命の親結ぶの神。地眞實奇特な介抱ゆゑ鰐の口を遁れ出で。やうくと福山の船に乗り九里の渡も千里の如く。とけしないやら怖いやら氣がくたびれてとろくと。船ばりに手枕して寐るとも思はぬ其の間に。詞まざくしい夢を見ました。わしや此方に様に斬らるゝ此方様は又腹切つて。女夫及の死人の爲と流瀧頂七流れ。殊勝らしい坊様が鉦をはつてお念佛。わしや悲しうてく何やら泣いてくだいたが。いうた事は覺えねども我が手に我身の回向して。念佛

甲すが耳に入りふつと目が覺めうつとりと。今のは夢であつたけなサア徒事ではあるまい。此方様の怪我過か但し浮世を見限つて。例の短氣が起つたか早う逢ひたや聞きたやと。地胸も心もわくせきして帆掛船さへまだるうて手繰つく程氣がせいた此の様に無事な顔。見まいかと思つたにわしやがつくりとなりました。善いにつけ悪いにつけ夢は三日が大事のもの。必ず人に逆らはず身を慎んで下さんせ。詞これ此の袖見さんせ。夢に泣いた涙で今に濡れてあるわいの地思へばく夢の間の悲しさが。本の事ならどうせうぞ夢が合うたらどうせうと。夫の膝にもたれ伏しフン聲を。あけてぞ歎きける。地源五は男氣打笑ひ。詞ア、氣がくたびれてはいろくのわけもない夢見るもの。身に金が入ると斬らるゝは上夢。おれも去年怖い夢。天狗の鼻に取付いて女護島へ渡ると見た。其の明るる日餘所から松茸と赤貝を貰うたと。地語ればおまんも嘖出して

エイ好い加減な事ばかり。ア、久しうて笑うた家では親の氣をかねて。誰にあまえる者がないわしや此方様にあまえる。あまやかして下さんせと頼杖枕身を横に。互に足を打ちもたせッし來し方語るぞ盡しなき。

地斯る處へ母親は下女下男引連れ。案内もなくつゝと入り。ハア、おまん此處にか左様あらうと思つた。來るなら來ると二人の親に何故知らさぬ。人も連れず着の儘で親の外間構はぬ氣か。地云ふ事いう

て仕舞うたりきりく戻りや迎ひに來たと。前後もなく云捨てけりおまん挨拶いはんとするを。源五兵衛押し止め突と出で。昨日迄は其の方へ。出入奉公下人分の事介。今日より元の菱川源五兵衛。一錢持たねど侍のちやくく。十萬貫目持ちやつても琉球屋の新兵衛。詞も違ひ座も違ふ。推參至極な案内もなく踏込んで。歸れといふは誰が事。此のおまんは身が女房侍の妻女は。夫の心次第にて親のまゝにはな

らぬ事。おのれが宿にて新兵衛を遇いた格とは違つたぞ。地其の方ばかり早や歸れ長居をせば引きずり出すと。烟草引寄せ烟吹きッ取つてつくべき方ぞなき。地女房さすが物仕にて詞を和らけ。御尤く連れて往んだら戻すまいと悪うお心懸つたさうな。親が千萬嫌うても主が心に好いたもの。戻さぬとても彼の子が戻らずに居やるまじ。地親も何しに留めませう。さりながら琉球屋ともいはるゝ我々娘一人をしつけかね。長持一つ送らぬと外間悪い沙汰もいや。第一彼の子が身祝ひ屹と仕立て、送りませう。新兵衛心も其の通り其の證據に今日は。祝うて餅を掲ぎまするちよつと戻して下さりませ。善哉祝うて戻しませう。サアおまん立つておじや。サアおじやいのア、しぶとい子やといひければ。おまんは中にうろくいと情なや疎ましや。あのゝものゝがやかましいちよつと戻つてさらりつと埒明けて來ませうか。何處へ。母めが言分

皆僞り。だましすかして連歸り。頼みを取つた掣の方へ。送らんといふ心底面つきにあらはれた。門より外へ一寸も出しはせぬぞ動くな。地母めも今日が明日になり千日なりとも居たくば居よ。おまんに於ては戻さぬと既に顔色變りけり。地母はもとよりたゞ者ならず。ア、町人のあさましさお侍の作法は知らず。是非に及ばぬ何とせう。駈落人のお尋ねものをそれでも武士が立つならば。いはれぬ肝精やかうより町所家主を。頼んで連れて歸りませう手間も隙も入らぬ事。地皆來いと起たんとすおまん取付きまあ待つて下さんせ。町所へ斷つて源五様を今の間に。牢へ入れうといふ事が連立つて歸りましよ。先づしつまつて下さんせ

これ源五様萬事人に逆らはず身の慎みと申した事。必ず忘れさんすな大事のお身ぢやが合點か。何も私が胸にあるちよつと戻つて親達を。なだめて歸ればさらりとすむ私次第にしていなさんせ。つい戻りましよと

いひけれども源五兵衛合點せず。調イヤ明日戻さば戻しせん。今日一日は此の源五が。戻さぬといふ一言。首になつても地言ひ通すと、フッさらく戻す氣色はなし。

地 母は名に負ふ我武者ものヤア、しやまだるい男ども。おまんを引立て連れて來い長つたと下男。床の上へ駈け上る源五兵衛駈け塞り。侍の女房に指でもさゝば片端に、泥躡切つて切りすゑん寄つて見よと睨めまはす。薩摩一國名取の男。源五兵衛に睨付けられ、フッ左右なく寄付くものもなし。調母事ともせず打笑ひ。臆病な奴等かな。昔が今に至るまでにらまれて死んだ者はない。おまんおじや手を引かうと立寄る處を抜打に。頼さきかけてすつばと斬る切られながら刀の刃に。しがみ付けば手の内くられ朱になつて逃廻る。おまんは母をきらせじと立ち掩ひ立ち隔たり。拔身の下へと廻りける男はおまんをよけんくとしけれども。せきにせいたる手ものびて見

込の曲合外れけん。おまんが左の肩先より前は乳房を袈裟がけに兩へさつと切下けられ、フッ既に最期と見えにける。母はひるます大聲あけ。調やれ人殺し切つたくと。地呼ばはる聲に當町隣町驚き騒ぎ我もくと駈け集り。手負をいたはり源五兵衛取逃すなとぞしめきける。調源五騒ぐ色もなく大肌脱いではつたとにらみ。やかましい町人ども逃すなとは誰が事。術によつて此の源五が立退かば立退きません。逃ぐるといふ字が聞きにくい刀を抜くは人を切る覺悟。人を切れれば死ぬるは覺悟嘘か實かこれ見よと。左の肋に刀を突立て。急いやつと引廻し返す刀を喉吹に。地立ては立て、扶けしが腹を深く切りたれば。腕先弱りのつけに反り、フッ半死半生あはれなり。地かかる所に風體千石ばかりなる。侍夫婦。供廻りはなやかに親新兵衛に案内させ。息をばかりに駈付け未だ死切らぬが嬉しやと。夫婦の手負を看病し耳に口寄せ大音上げ。

調エ、いひがない源五殿。先年京都で參會した林と申した侍女今は笹野三五兵衛。是は我が妻其の時の小萬見忘れたか。不慮の縁によつて親の敵の在所別名まで聞いたる故。翌年敵を討ちおほせ數年の本望遺恨をはらし。此の小萬と夫婦となり本國本知に歸參して。會稽の恥辱を雪ぎ武門の美名をかゝやかすも源五殿の御情。御恩は海山報じても猶報じがたし。まづ御自分の行方を尋ね拙者が主人を頼み入り。お國を廣う彼のおまんと比翼の盃取結ばんと。心の限り尋ねても今日まで付け方知らず。其の内にあのおまん外の縁に付けさせては恩を報するふひもなし。まづ外の手を止むるため我等が方へ呼取つて。靜かに貴殿を尋ねんと我々夫婦が思案にて。媒人頼み作り名して。云入れの頼み送つたは此の三五兵衛であつたぞや。地残り多や残念やさりながら曲がない。よし此の方こそ知らずとも笹野三五兵衛こそは。親の敵を討ちおほせ本

懐を達せしとは。九州に隠れなきものをな
ぜ尋ねては下されぬ。但し今零落て諍ふま
いとの身の卑下か。但し又拙者が昔の恩を
忘れて。 見ぬ顔しさうな三五兵衛と見付
けられたか恥かしい。さりととは聞えぬ恨め
しいせめて好い折対面して。詞をかはして

千石取が受取つたりや松の風風に當つるな
身を揉むなとりくさまく取りつくる
ひ。乗物に乗せ三味線に乗せて。 諸ふは
源五兵衛どこへ往きやるぞ薩摩の山の山
は。寶の山とかや。

満足した。 地後に聞いて三五兵衛に追腹切

れといふ事か。さりとては曲もない其の筈

ぢやない源五殿とステイだき。付いて泣き

ければ。いまはのおまんも目を開きじろり

と見たる目は涙。源五兵衛も手を合せ泰い

とばかりにて各わつと泣く涙 ヲン落ちて

ながれて紅のあけの。血汐も洗ひけり。

地ア、三五殿御夫婦の御禮は來世でく。

とてももの情に御介錯早うくと苦む聲。エ

、腑がひない氣遣ひすなもつとも深手とい

ひながら。本國長崎に黄陳といふ南蠻外科。

昔の華陀が仙方を傳へきたる筋。折れた

る骨落ちたる首もつぐ名人。此の療治にか

けたらば。夫婦が命も恙なく。千年までは

右之本令吟覽頌句音節墨譜
等不殘毫厘令加筆候可有開
版者也

竹 本 筑 後 掾

本竹

敬傳

重而予以著述之本令校合候

畢全可爲正本者歟

近 松 門 左 衛 門

正 本 屋 山 本 九 兵 衛 版 圖

大 阪 高 麗 橋 登 丁 目 山 本 九 右 衛 門 版